



Title	「～ヨル（オル）」の残存について
Author(s)	井上, 文子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1994, 28, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56490
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「～ヨル（オル）」の残存について

井上 文子

1 はじめに

東西方言差の指標のひとつとしてあげられるように、東日本の「～テル」にあたることを、西日本各地では「～ヨル」・「～トル」などで、進行態・結果態を区別して表すことはよく知られている。

しかし、一口にいわれるこの進行態と結果態との使い分けも地域によってさまざまであり、明確に区別するものからまったく区別を行わないものまで、各段階が存在している。その中で、西日本全域におけるアスペクト表現の大きな流れは、進行態と結果態とが「～テ」を介する形式で統合されるという変化である（井上1992）。言い換えれば、「～ヨル（オル）」と「～トル（テオル）」で言い分けていたものが、「～トル（テオル）」ひとつになるという動きである。つまり、進行態・結果態をはっきりと区別していたところへ、結果態の形式が進行態に侵入し、最終的には進行態・結果態を本来の結果態の形式で表すようになるのである。これには、内的変化の進行に加えて標準語の干渉が加速度を与えていることも考えられるが、この現象により、本来進行態を担っていた「～ヨル（オル）」がアスペクトの枠から追い出されつつある状況が観察できる。

本稿では、このアスペクト形式「～ヨル（オル）」の消滅過程において生じる残存現象に焦点を当てることにする。

2 卑語の「～ヨル」とアスペクト形式の「～トル」

「～ヨル」という形式は長野県南部以西に広く分布しているわけであるが、大部分の西日本方言において「～ヨル」が待遇的に中立なアスペクト形式であるのに対して、関西中央部における「～ヨル」は卑語形式となっている。前節で述べた進行態・結果態の統合がこの状況に大きく関与していることは、以前に考察を行った（井上1993）。

そこで問題になったのは、内的変化として、進行態に「～トル」が浸透し、「～ヨル」が追い出されつつある地域、あるいはその変化が完了し、現在「～トル」だけでアスペクトが表されるようになった地域である。これらの地域では卑語形式である関西中央部での「～ヨル」を受け入れる素地を持つことになったわけである。それは、卑語の「～ヨル」の分布域との境界付近にあたっている。

つまり、「～ヨル」・「～トル」で進行態・結果態を言い分けていたのが、「～ヨル」が消え、「～トル」で統合したことによって、「～ヨル」の体系の空き間に卑語の「～ヨル」が入って来ていると言うことができる。逆に言えば、進行態の「～ヨル」が消えつつあるところに卑語形式の「～ヨル」が入りやすいのだと考えられる。

一方、卑語「～ヨル」の進出と深い関わりを持つアスペクト形式の「～ヨル」はどのようにして消滅して行ったのであろうか。それが失われていく段階ではどのようなことが起こっているのであろうか。現在、進行態のアスペクト形式として「～ヨル」を使っていない地域、つまり、すでに「～テ」による統合が起り、「～トル」だけで進行態も結果態も表現するようになった地域に焦点を当てて、「～ヨル」の消滅の過程を探ってみたい。

3 「～ヨッタ」

現在、アスペクト形式として「～ヨル」が存在せず、「～トル・～チョル」だけで進行態・結果態を表している地域にも、「～ヨッタ（オッタ）」が見られることがある。

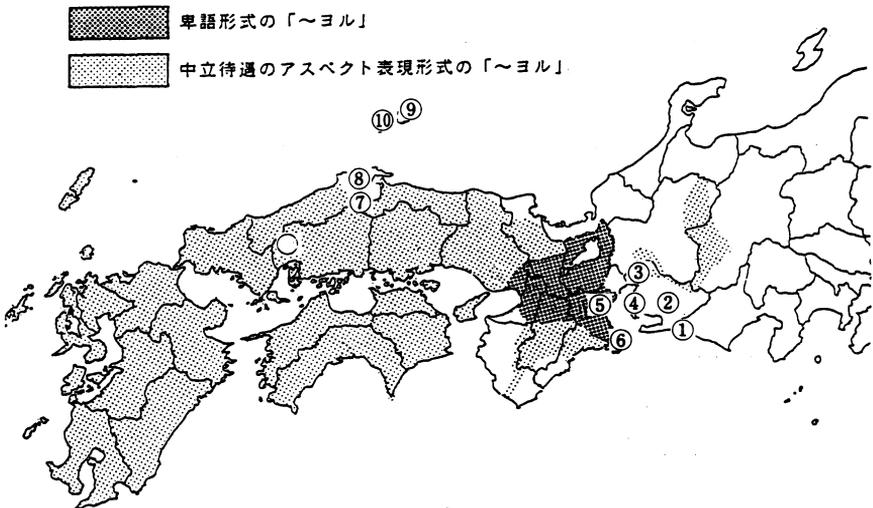
ここでは、各地方言の談話資料を用いて、その出現状況を観察することにした。なお、用例中の下線（ ・ ）は筆者が付したものである。注記（（笑い）など）や記号（……など）を一部省略した部分もあるが、

図1 対象地点

- | | |
|-------------------|----------------|
| ①静岡県浜名郡新居町 | ②愛知県南設楽郡作手村菅沼 |
| ③愛知県西春日井郡師勝町大字高田寺 | ④愛知県常滑市矢田 |
| ⑤三重県安芸郡美里村北長野 | ⑥三重県志摩郡阿児町立神 |
| ⑦島根県仁多郡横田町大字大馬木 | ⑧島根県大原郡大東町春殖畑鶴 |
| ⑨島根県周吉郡中村伊後 | ⑩島根県知夫郡西ノ島町宇賀 |

参考地点

○広島県佐伯郡水内村



談話文（カタカナ）、標準語訳（（ ）内、漢字かな交じり）はともに、原文のままである。

対象とした地点を地図上に示しておく（図1）。¹⁾ いずれもアスペクト形式としての「～ヨル」を持たない地域である。ただし、単語としての「～ヨル」は使用する地点もある。

3-1 回想、過去の進行態の「～ヨッタ（オッタ）」

まず、愛知県三河地方の「～ヨッタ（オッタ）」の例である。

愛知県南設楽郡作手村菅沼（日本放送協会1981 a）

ニジッソクグレー ナンショー ヨーナビニ コキオッタ
 (20束ぐらい なにしろ 夜なべに こいたものだ)

これは、「昔の食物」についての自由会話で、若い頃には毎晩稲をこいていたという趣旨の発言である。過去の習慣、反復経験を回想するという意味合いのものとなっている。この三河地方の資料では「～ヨッタ」の出現数が非常に少なかったのだが、愛知県教育委員会1985によれば、尾張地方ではかなり頻繁に現れるようである。

愛知県西春日井郡師勝町大字高田寺（愛知県教育委員会1985）

イワッセヨッタ ((昔はよく) おっしゃっていた)
 イワシヨッテ ((よく) おっしゃって)
 テツダッテマイヨッタモン ((よく) 手伝ってもらったもの)
 アリヨッタ ((昔は) あった)

愛知県常滑市矢田（愛知県教育委員会1985）

ノミョーッタ (飲んでいたものだ)

尾張地方のこれらの「～ヨッタ」はいずれも過去の習慣や反復動作など

を回想する用法であると言えよう。

三重県中勢・北勢地方でも「～ヨッタ（オッタ）」が現れる。

三重県安芸郡美里村北長野（三重県教育委員会1984）

ワーシラ タキヨッタンヤ カンカンデ

（わたしらは 炊く（煮る）のが例でした カン（空カン）で）

これは、「戦争に出た思い出」を語ったものである。

美里村の用例はわずかであったが、次の阿児町では、「～オッタ」が頻繁に使用されている。

三重県志摩郡阿児町立神（三重県教育委員会1984）

ナマコヒキニ ハッカアマシーツ イキオッタンニヤ

（海鼠ひきに 二十日あまりずつ 行ったものだ）

シラキリボンオ ヨーケ ノー ツクリオッタ

（白切干を たくさん ねえ 作ったものだった）

これらは、「地名の由来、世間話」の中の「海鼠とりの話」、「百姓仕事」からの用例である。いずれも昔のことを語っている。

加えて、同じ資料の「立神の海の地名」には、過去の回想の意味で、「～オッタ」の形以外に次のような「～オッテ」形も現れた。

グルグルット マワッテ ナマコヒキオ シーオッテ

（グルグルっと 回って 海鼠ひきを したものだ）

このように、中部地方においては、地域的にある連続性を感じさせながらも、分散した地点で、過去進行・過去の反復経験・過去の習慣・回想を示す「～ヨッタ（オッタ）」が用いられている。²⁾

また、愛知県と三重県には、以下のような例も報告されている。

愛知県西春日井郡師勝町大字高田寺（愛知県教育委員会1985）

ナカリヨッタ（（昔は）無かった）

エラカリヨッタ（大変だった）

ヨカリヨッタ、エーカリヨッタ

三重県中勢（佐藤1982）

ナサケナカリヨッタ。

ここでは、本来動詞につく「～ヨッタ」が、形容詞にまでその使用範囲を拡大していることになる。「～ヨッタ」に上接している形容詞の活用語尾を見ると、「～カリ～」形となっていて、「～ヨッタ」を助動詞として把握していると言えよう。「～ヨッタ」が回想の意味と結びつき、一種の助動詞として析出したために、形容詞にまで接続することができるようになったのではないかと考えられる。

一方、島根県出雲地方には「～ヨッタ」が頻出する。

島根県仁多郡横田町大字大馬木（国立国語研究所1980）

ホーホー ケー アゲナズィブンニナッテカラ ウエヨッタダカ

（ほうほう つい あんな頃に なってから 植えていたのか）

ワカエズィブン ニワ ワ ソノ ウー カネウリシヨッタダ

（若い時分には その 鉄売しよったのだ）

これは「田植・草取」の思い出と、昔この土地にいた「いつも襦袢を着て欲のなかった人」の話である。過去の動作の繰り返しを回想的に述べている。

島根県大原郡大東町春殖畑嶋（日本放送協会1981b）

タダ ソエデモ オランツガ コドモノ ジブンニャー マー ケタ
イゲナ ウチガ チャッチャ カッカ イーヨッタ

（ただ それでも（やはり） われわれが こどもの ころには ま
あ たいがいの 家が 「ちゃっちゃ」「かっか」と 言っていた）

ホンニ カタ ハッシャカエテ ナリヨッタンダドモ

（実際 肩を 痛めて やっていたものだが）

この2つは、「昔のことば」と「昔の仕事・今の仕事」を話題にしたものである。こどもの頃「おとうさん」を「チャッチャ」、「おかあさん」を「カッカ」と言っていたことや、若い頃の仕事のことなど、かつての自分自身の経験を回想している。

島根県周吉郡中村伊後（日本放送協会1981c）

ムギオ ソレー ハンブイジョー マ ムギバッカリッテ ユーホド
クィヨッタワケダダケンノー

（麦を ほら 半分以上 まあ 麦ばかりと いうほど（のものを）
食べていたわけだからね）

デテワ ワラウィヨッタ

（（家から） 出ては 笑ったものです）

いずれも「昔の食べ物」についての話で、麦を食べていたという過去の習慣や経験を語っている部分である。

島根県知夫郡西ノ島町宇賀（日本放送協会1981c）

サー アノ クチー ツケル オハグローノー ムカシャー ハオ
ソメヨッタダ（ケン）

（さあ あの 口に つける おはぐろねえ 昔は 歯を 染めたも

のだから)

ヤマカラ モドッテ ソエカラ ユーハン タベダデヤ サカナ マ
ライーイキヨッタ

(山から 帰って それから 夕飯を 食べると 魚を もらいに行
ったものだ)

上の用例は、「トンドまつり」という火まつり行事と「四つ張り網」という漁法にまつわる思い出話である。

以上は、島根県出雲地方の談話資料で見られた例のはんの一部である。自由会話は昔のことを話題にしたものが多いせいもあるだろうが、非常に多数の「～ヨッタ」の例が得られた。³⁾

なお、出現頻度に関しては、出雲地方内部においても地域差があるようである(国立国語研究所1980)。南部では、「行キヨッタ」・「行キョッタ」などが、北部にくらべて多用される。これは隣接する地域に「～ヨル」が存在することと関わりがある。ただ、広島県の影響で「～ヨッタ」が新たに使われ出したと見るのではなく、後述するように、進行態としては失いかけた「～ヨル」をかりうじて「～ヨッタ」の形で保っていると考えるのが自然であろう。

以上の「～ヨッタ」が現れる地点は、進行態・結果態をいずれも「～トル・～チョル・～チャー」などで表し、「～ヨル(～オル)」が用いられない地域である。しかし、「～ヨッタ」の形式は、「～ヨル」がなく「～トル・～チョル」がある地域に存在するだけではない。進行態のアスペクト形式として「～ヨル」のある地域には当然「～ヨッタ」も存在する。

以下は、広島県における「～ヨル」・「～ヨッタ」の例である。今までに見てきた愛知県・三重県・島根県の用例と違って、「～ヨル」が現在形で

も使われている。最初の例は、現在進行態であり、その次の2例は、温泉に行った思い出を回想しながら語っている。

広島県佐伯郡水内村（日本放送協会1981b）

フロ ターテ マチヨルケーノー

（ふろを たいて 待っていますからね）

マキ ウイロー カイニ イキヨッタヨノー

（ちまき（と） ういろを 買いに 行きましたね）

オナゴノ コナラノ ホーズキオ ヒトツ コーツリャ ハー モド
リヨッタンヨ

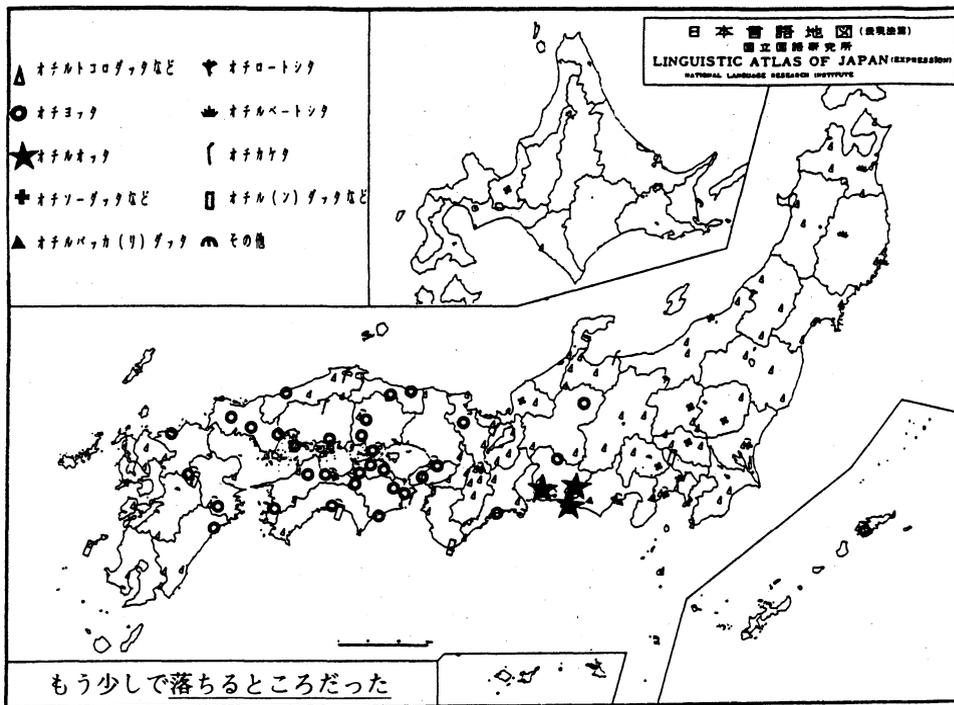
（女の 子ならね ほうずきを ひとつ 買ったら もう もどって
きたものですよ）

細かく見ると、「～ヨル」の用法は他にも存在するが、ここでは、アスペクト形式としての「～ヨル」が持つ機能のうち、過去の反復経験・習慣・回想などという意味が、「～ヨッタ」の形で限定的に使用されるようになったものと見たい。

3-2 未然過去、過去の将然態の「～ヨッタ」

国立国語研究所1979によると、「もう少しで～するところだった」の意で「～ヨッタ」が使われているところが少なからず存在する（図2）。そのほとんどは、進行態のアスペクト形式「～ヨル」を使用する地域であるが「～ヨル（オル）」の形を持たないにもかかわらず、愛知県、静岡県では「～オッタ」が出現している。

図2 未然過去（過去の将然態）の「～ヨッタ（オッタ）」
 国立国語研究所1979に加筆



これに関して、次のような報告がある。

静岡県浜名郡新居町（山口1985）

落チルオッタ （（あぶなく）崖から落ちるところだった）

降ラレルオッタ （（もう少し畠にいたら）雨に降られるところだった）

愛知県東部（真田1981）

雨が降ルオッタ （降るところだった）

回想などの「～ヨッタ」が連用形についていたのに対して、これら未然過去の「～オッタ」は終止形あるいは連体形につく形をとっている。両者ともアスペクト形式「～ヨル」の用法の一部でありながら、接続を異にしているのである。しかし、この現象も、回想の「～ヨッタ」が形容詞につく例と同様に考えることができよう。つまり、「～ヨッタ」が未然過去を表すものとして析出したために、接続は問題ではなくなったのではないかという推定である。

ただし、談話資料では、当該地域での未然過去の用例は見当たらなかった。

3-3 「～ヨッタ」の析出プロセス

「～ヨル」がない地域に「～ヨッタ」が存在していること、「～ヨッタ」のある地点には、隣接して進行態のアスペクト表現形式としての「～ヨル」が分布していることから、かつてこれらの地点でも「～ヨル」が進行態のアスペクトとして使用されていたと考えられる。

さらに、「～ヨッタ」が、過去の反復経験・過去の習慣・回想・未然過去といった、「～ヨル」によるアスペクト表現の限定的な一部分を担って

いることから、これらの地域に見られる「～ヨッタ」はかつてアスペクト形式であった「～ヨル」が残存したものとみなすことができる。

この「～ヨッタ」残存のプロセスには、進行態・結果態の統合現象が大きく関わっている。「～ヨル」・「～トル」で進行態・結果態を言い分けていたのが、「～トル」が進行態に浸透し、これに伴って「～ヨル」が追いつき出され、最終的には「～トル」のみになるという動きである。このように、「～テ」による進行態・結果態の給合が起こり、アスペクト表現形式「～ヨル」が消滅していく段階において、本来「～ヨル」の担っていた進行態の用法が変容して残存したのだと推定されるのである。

そして、「～ヨッタ」=「～したものだった」(回想)などというように、限定された形式と残存した用法とが強く結びついて意識され、固定化した場合、「～ヨッタ」が独立して析出されるにいたったのであろうと考えられる。このような現象の起こった地域では、進行態のアスペクト形式である「～ヨル」が完全に消滅してしまっても、「～ヨッタ」は限定された用法を保持し、その使用範囲を比較的自由に拡大することができたのではないかと推測するのである。

また、「～ヨッタ」が本来とは異なる接続をしている場合も見られるが、「～ヨル」の用法の一部を伝えていることから考えても、残存したものと扱って問題はないであろう。この場合も、特定の形式で特定の意味が独立して表現できると意識することによって「～ヨッタ」が析出し、接続を異にする形においても使われたり、形容詞にまでも接続したりしたのではないかと考えられる。

4 お わ り に

本稿では、ある形式の消滅過程において、限定された表現形によるのみ、本来その形式の持つ意味の一部分である限定された用法が残存すると

いう現象に焦点を当てた。具体的には、現在、進行態のアスペクト形式としての「～ヨル (オル)」を持たない地域においても、「～ヨッタ (オッタ)」のような特定の形式で、回想や過去の習慣・反復経験（過去の進行態）、未然過去（過去の将然態）などの意味を表す地点が存在するというものである。

この現象が見られる地点には、隣接して進行態のアスペクト形式としての「～ヨル」が分布していることから、かつてこれらの地点でも「～ヨル (オル)」が進行態のアスペクトとして使用されていたと考えた。そして、進行態と結果態との統合が起り、「～ヨル (オル)」が消滅していく過程において、本来「～ヨル (オル)」の担っていた進行態の用法が変容して残存したと推定したのである。

ところで、残存した用法が、いずれも“過去”を示すという点において共通していることが注目される。この点については他の文法的要素の変容（たとえば中央語史における「タリ」の機能の変遷）などとも比較しつつ、さらに総合的に検討したいと考えている。

注

- 1) なお、琉球列島の一部には、共通語的発語として、奄美大島戸口における過去の継続的動作の回想・報告の「～ヨッタ」(永田1988、永田1990)、石垣島石垣における「～ヨッタ」(永田1990)、沖縄本島における事実報告の「～ヨッタ」(本永1984)などがあるが、ここでは考察の対象としなかった。
- 2) 「～ヨッタ (オッタ)」が示す過去進行・過去の反復経験・過去の習慣・回想などの意味は、以下の地点では、次のように「～トッタ」でも表現できる。

愛知県南設楽郡作手村菅沼（日本放送協会1981a）

ソナナジコト ヤットッタダイノー

（そんなようなことを やっていたものだねえ）

三重県安芸郡美里村北長野（三重県教育委員会1984）

ウン ソレガ アノー ナンノトコデ シトッタンヤテ

（うん その人が あの あそこの所で（バス営業を）していたんだって）

三重県志摩郡阿児町立神（三重県教育委員会1984）

タテガミデモ ヨーケ コートタンヤロ

（立神でも たくさん 飼っていたんでしょう）

阿児町では「～トッタ」は「～トタ」となる。

ただし、形容詞につく「～ヨッタ（オッタ）」については「～トッタ」とは置き換えができないようである。

- 3) 出雲地方では、中部地方の「～トッタ」にあたる「～チョッタ」で、過去の習慣・回想が表現された例は見られない。中部地方にくらべて、出雲地方では「～ヨッタ（オッタ）」が回想を示すものとして固定化していると言えよう。

これには、近隣にアスペクト形式の「～ヨル（オル）」が存在するかどうかに関与していると考えられる。中部地方諸方言では、「～ヨル」は一部地域で使用されるにすぎず、ほとんどの地域では「～トル」が専用される。これに対して、出雲地方では、周辺の中国方言全般に「～ヨル」が優勢である。つまり、出雲地方では、周辺の「～ヨル（オル）」の存在によって、「～ヨッタ」が安定したものとして用いられるのであろうと推測される。

また、中部地方と出雲地方の「～ヨッタ」の出現頻度の差も、この状況に基づいていると考えることができる。

参 考 文 献

- 愛知県教育委員会（1985）『愛知のことば——愛知県方言緊急調査報告書——』
 愛知県教育委員会（1989）『愛知県の方言』
 井上文子（1992）「「アル」・「イル」・「オル」によるアスペクト表現の変遷」
 『国語学』171
 井上文子（1993）「関西中央部における「オル」・「～トル」の軽卑化のメカニズム」『阪大日本語研究』5
 神部宏泰（1982）「島根県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一／編『講座方言学8——中国・四国地方の方言——』国書刊行会
 国立国語研究所（1979）『表現法の全国的調査研究——準備調査の結果による分布の概観——』国立国語研究所

- 国立国語研究所(1980)『国立国語研究所資料集10-4 方言談話資料(4) — 福井・京都・島根 —』秀英出版
- 国立国語研究所(1985)『国立国語研究所資料集10-8 方言談話資料(8) — 老年層と若年層との会話 — 群馬・奈良・鳥取・島根・愛媛・高知・長崎・沖縄』秀英出版
- 佐藤虎男(1982)「三重県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一/編『講座方言学7 — 近畿地方の方言 —』国書刊行会
- 真田信治(1981)「方言」北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀/編『日本文法事典』有精堂
- 永田高志(1988)「沖縄に生まれた共通語の文法」『日本方言研究会第47回研究発表会発表原稿集』
- 永田高志(1990)「沖縄に生まれた共通語(文法編)」『琉球の方言15』法政大学沖縄文化研究所
- 日本放送協会/編(1981a)『全国方言資料3 東海・北陸編』日本放送出版協会
- 日本放送協会/編(1981b)『全国方言資料5 中国・四国編』日本放送出版協会
- 日本放送協会/編(1981c)『全国方言資料8 辺地・離島編Ⅱ〈北陸・近畿・中国・四国〉』日本放送出版協会
- 三重県教育委員会(1984)『三重県方言収集緊急調査』
- 本永守靖(1984)「南島方言と国語教育」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一/編『講座方言学10 — 沖縄・奄美地方の方言 —』国書刊行会
- 山口幸洋(1985)「方言体系」『新居町史3〈風土編〉』

(文学部助手)